

ふくおかAL通信

～県立学校の教室から～

第42号
(R3.12.28)

福岡県立学校
新たな学び
プロジェクト

★ 福岡県立 修猷館高等学校 SHUYUKAN HIGH SCHOOL

“世のため人のため” 質朴剛健 不羈独立 自由闊達

修猷館高等学校は、天明4年（1784年）に設立された、歴史と伝統のある普通科高等学校です。「質朴剛健 不羈独立 自由闊達」の校是の下、「高い志と豊かな心をもって『世のため人のため』に尽くす真のグローバルリーダーの育成」を目指しています。「『全人教育』を中心に据えた教育活動の実践」、「次代の国際社会や日本を担う人材・リーダーの育成」、「教育の先進性と地域における教育の役割を見据えた改革の推進」、「日本の代表的な高等学校としての教育活動の推進」を将来ビジョンに掲げて教育活動を行っています。

1 授業改善の具体的取組

(1) 授業実践

昨年の3月から4月にかけて、全教室にプロジェクター、スクリーンが設置されました。不具合により、使いたい時に使えないという状況が生じたため、各教員が基本的操作をできるように情報委員会でマニュアルを作成しました。ICT環境が整い、積極的にICTを活用する教員が増えました。

本校では、メタ認知活動が活発になり、より深い学びにつながるICTの活用を考えています。



「物理」中野雄揮 先生 本時の内容：電磁誘導



本時は、知識構成型ジグソー法によるエキスパート活動後に、ペア（1対1）で教え合い活動を行いました。活動内容は以下の2題です。

- ①磁場を横切る導線（ローレンツカ）
- ②磁場を横切る導線（ファラデーの法則）

エキスパート活動では、タブレット端末を活用し、ペアで2枚の学習プリントを教え合いました。スクリーンにペア分けを表示していますが、ペアは固定せず、毎時間変更しています。生徒たちは、相手が理解できるように工夫しながら活発に教え合っていました。

「コミュニケーション英語Ⅲ」田部葉子 先生 本時の内容：子どもの貧困について

このLL教室には、45台のタブレット端末を完備しています。本時は、1人1台端末で授業を行いました。まず、導入において、「子どもの貧困について」自分に何ができるのかを考え、Google Jamboardを活用して意見を共有しました。自分の考えと他者の意見を比較しながらペアで意見交換をしました。展開時においては、タブレットを活用して個人でエッセイライティングを行いました。使用したアプリでは、解説動画を見ることができ、何度も見直す生徒の姿がありました。1人1台端末だからこそできることです。



(2) 「語り合い」の重視と「語り合い」に繋がる職員研修

ア 昨年度の研修内容

テーマは、「教育、学校、授業、ひと・・・コロナ禍を通して考えたこと～皆さんで話してみませんか～」です。趣旨は、コロナ禍において、学校がかつてない経験をする事になり、これまでの対応を今のうちに振り返る必要があると考えたところにあります。それぞれの視点や感性、展望を個々の言葉で語り合うことが、私たちの「これから」に繋がると考えています。本研修は、“World Cafe”形式を取り入れ、振り返り・分かち合いの時間を設けました。

<ディスカッションの内容>

- ・学校の先生はYouTubeの無料動画を流せばいい
- ・オンライン授業の功罪と、授業の「遊び」のもつ光
- ・「不便さと教育」
- ・ a t a m a + (AIを用いた学習システム)
- ・「教育についての『いつもと同じ話』」
- ・「教育の奇跡」

イ 本年度の研修内容

新型コロナウイルス感染症対策を念頭に、実質的な研修の機会を確保することを目指し、特にネットワークを利用した分散型での実施を考えました。そして、**「校務や授業におけるICT機器の活用の具体的経験」～未経験を「経験値1」に～**というテーマで企画しました。

<具体的内容>

- 事前に配付したテキスト資料を参照しながら、
- ・校務用サーバー内に準備された各種データ、ツールの利用
 - ・教員用 Teams、生徒共用 Teams の具体的活用
 - ・教室 PC、プロジェクターのほか、新規導入の Chromebook 等の ICT 機器の利用
 - ・ Google Classroom (授業用 SNS) の利用
 - ・授業準備、校務等におけるスマートフォンの利用
- などに関する 21 種類の「課題」

各課題には、それぞれ「Point」を付与し、各職員は、合計 10Point (概ね 3~4 課題程度) 以上の新規獲得を目標に課題に取り組みました。この課題への取組は、各自の経験値を上げると共に職員間の教え合いや意見交換、つまりは「語り合い」に発展していきました。

2 評価について

評価については、若手中心にプロジェクトチームを結成し、公平性・妥当性・信頼性ある評価を検討中です。「ループリック等による明示的な評価によって、逆に生徒を枠内に押し込め込んでしまわないか」「授業中の発言を評価対象とすると、自由闊達な発言がなくなるのではないか」等の懸念もあり、多様性こそが「修猷文化」であることから、授業スタイルと同様、評価法も1つに限定できないと考えています。今後、質の高い定期考査同様、教員間の熟議により観点別の評価も定まってくると思われれます。

3 今後の方向性

「世のため人のため」に骨太の教育を継続していきます。大学入試が変わっても「修猷の学び」は変わりません。本校の多様性に富んだ生徒一人ひとりの特性を最大限に尊重し、伸ばさせることを重視していきます。そのためにも、多様な特性を持った教師一人ひとりが、自身の求める授業の姿について、それぞれの言葉で多様に表現し、語り合う中で、個々の教師の資質向上と、総体としての「修猷館教育」の更なる充実を目指していきます。

◆取材に協力いただいた先生方

・岡本 圭吾 校長

「多様な修猷文化の中で、21世紀の日本を担い、国際社会で縦横無尽の活躍ができる骨太な人材を育成」

・渡邊 康宏 教務部長

「私たちも主体的に学ぶ武器を！武器が違うから授業スタイルが違う！それらを大切に！」

・高橋 利夫 研究支援課長

「大きな変化の時。得るものと失うものの双方について、丁寧に考えたい」

・福崎 泰規 情報委員会 (ICT 環境整備担当)

「変わらないために、変わっていくことが大事では」